●管理釣り場編

浅ダナのセット釣り

最近の傾向

管理釣り場の釣り方を述べるとき、浅ダナのセット釣りを抜きにしては語れないだろう。1年中浅ダナのセット釣りしかやらない管理釣り場の名手がたくさんいるし、実際、各大会で好成績を残している。

そして、その釣り方は毎年進化し続けているが、では今までの基本的なセット釣りと大きく違うのかというと、そうでもない。しかし、確実に違うところもある。

そもそも、セット釣りというのは、ダンゴに魚が食ってこない時合のとき、その対応策として取られた手段だ。野釣りでの角麩のセット釣り、冬場でのおかゆのセット釣りなどだ。

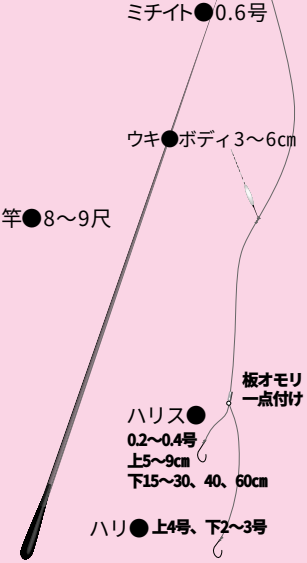
しかし、それは魚の密度が薄い、あるいは水温が低くて魚が固形物にしか食欲をそそられないことによる対応だった。そして近年、ダンゴに当たるけれど釣りきれない時合

セッティング

●竿＝8～9尺
長さはバラケをコントロールできる最短が望ましい。したがって、8尺ないし9尺となる。
●ミチイト＝0.6号
冬の低活性を考慮し、0.5号、0.4号が良いという人もいるが、トラブルなど総合的に考えて、0.6号で十分だ。最小のウキが立つ太さであればOK。
●ハリス
上ハリスの長さは、バラケを持たせて釣る場合は、5～7cmで、バラケへの反応が強すぎる場合は短くする。バラケを抜いて釣る場合は、1cm刻みの調整が必要。
下ハリスの長さが最も肝心とされるが、必要以上に神経質なる必要はない。目安は、20～40cm。よっぽど渋いときは、50cm、60cm、ときには80cmになることもある。ただし、下ハリスが短くて当たらないということもあるが、逆に長過ぎてアタリが出ないこともあることを覚えておこう。
●ハリ＝上4号、下2～3号
●ウキ＝ボディ3～6cm

この釣りで最も重要なのがウキであろう。はっきり言ってウキが命。ボディは3～6cm。これはタナによって異なるが5mm刻みでトップの形状での変化も念頭に入れておきたい。
最もオーソドックスなトップは、0.8mmのパイプトップ。その他に、0.6mm径のムクトップがあると良いだろう。そして、活性がやや高いときに使う、1mm径のパイプトップがあると完璧だ。
●オモリ負荷量は、0.25mm厚の板オモリで、5～12mm角程度。

オモリ
実寸大
●オモリのサイズ
0.25厚
5～12mm角

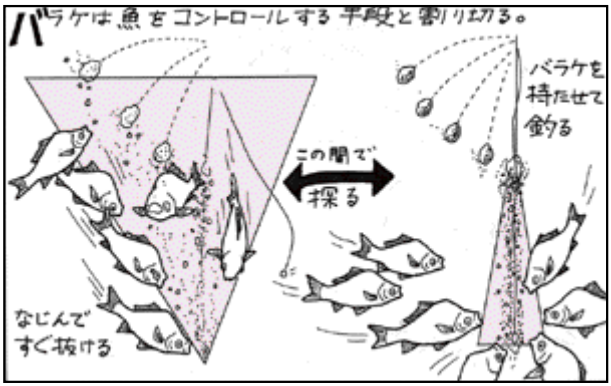


でのセット釣りが主流になりつつある。

暖期のセットと寒期のセットでは多少ニュアンスが違う。寒期はそもそもダンゴは追わない。だから、その時合をバラケでコントロールし、くわせエサを効率よく食わせていくことが前提だ。したがって、バラケは魚をコントロールする手段と完全に割り切ろう。

コントロールの仕方は、バラケの持たせ方で調整しよう。基本は、まずバラケをきっちりなじませることから始める。なじんですぐ抜けるか、ジワジワと抜けるか、かなり持たせて釣るか、その範囲でアタリが出るところを探っていく。

いずれにしても、バラけた後の麩の粒、さなぎ粉の粒、ペレットの粒にへら鮒が反応し、くわせエサも一緒に吸い込むという図式が成立しなければ、良い釣果は得られないのである。



バラケのブレンドパターン パターン1

メーターでの基本ブレンド

特S100cc＋新B200cc＋パウダーベイトヘラ200cc＋水100cc

バラケのブレンドパターン

パターン2

「ダンゴの底釣り夏」でまとめる「粒戦」ブレンド

ダンゴの底釣り夏50cc＋新B250cc＋粒戦50cc セット専用バラケ150cc＋水100cc

エサの作り方●一緒練りでさっとかき混ぜ、5分くらい放置した後、再び20回ほどかきまぜる。

●釣り方&エサ使いのコツ

パターン①は、重さ、バラケ具合、まとまりとバランスのとれた配合で、圧や大きさ調整がしやすいので、作ったままの状態で打ち始め、ウキの動きを見ながら、エサの手直しをしていこう。エサ付けの対応で、持たせたり抜いたりを繰り返し、アタリのでる方向を探る。

持たせた方が良いなら、エサを硬くする方向へ手直しする。このとき、必要以上にエサにネバリをつけないために、さらに「スーパーダンゴ」を100cc加えた配合に作り替える。逆に抜く方向が良いときは、やわらかくするので、「パウダーベイトヘラ」を100ccに減らす。

やわらかくしてアタらないときは、ウワズリ傾向にあるので、これを抑えるために、下方向へのバラケを促すために、「粒戦」追い足そう。「粒戦」1に対し、水1で作り置きしておき、ひとつかみずつ足し、ウキの動きを抑えるようになるまで、少しずつ入れていこう。あまり多く入れすぎると、まとまりにくくなるので、注意が必要だ。

バラケエサの基本的な考え方は、タナで膨らみ下方向へバラケるイメージ。「粒戦」が入っていることで、より一層効果が期待できるのが、パターン②のブレンドだ。

打ち始めは、丁寧に丸めたり、ラフ付けしたり、あるいは、大きさを変えたりして様子を探る。気を付けたいのは、バラケさせすぎないこと。へ

バラケのブレンドパターン

パターン 3

「粘力」でまとめる「粒戦」ブレンド

Ⓐ粒戦100cc＋水100cc

Ⓑセット専用バラケ200cc＋鬼バラ200cc＋特S100cc＋粘力スプーン1杯＋水150cc

エサの作り方●最初に「粒戦」100ccに水100cc入れて10～15分なじませる。これとは別に「セット専用バラケ」200cc＋「鬼バラ」200cc＋「特S」100cc＋「粘力」スプーン1杯＋水150ccを作って7～8分なじませる。かき回してほぐしたら、ここに「粒戦」を加えて手水をしながら10回くらい良くかき混ぜる。出来上がりはややわらかめ。

ら鮒にくわせエサのほうへ興味を向かせないと、食いアタリがなかなか出なくなる。

ラフ付けや大きめに付けたときにアタリが出るときは、エサをやわらかい方向へもっていくと良い。この場合は、手水で徐々にやわらかくしていく。この調整でウワズった場合は、パターン②の「新B」を200ccにしよう。

バラケが落ちてから暫くたたないとアタらないときは、バラケからクワセを離さないといけない状況なので、ハリス段差を広げよう（下ハリスを長くする）。ただし、あまり下ハリスを長くすると、余計なアタリが出てしまい、釣りが難しくなるので、数センチ刻みで、徐々に伸ばしていくことが大切だ。

パターン③は、バラケる「粒戦」を粘る素材でまとめたもの。このパターンでは「特S」や「粘力」がそれにあたる。

このエサは、親指の頭大に大きくエサ付けし、常に一度深くなじませるのがポイント。エサの固まりをタナに入れて、そこからすぐにバラケが落ち、ウキが上がってウドンだけで食わせる釣り方だ。なじませてバラケが落ちるのに長くても2～3秒以内にウキが上がってくるようにしよう。

この釣り方では、魚が水面に見えるようなことも起きるが、浮いた魚は無視して、下に集まる良型を釣っていくこと。ただし、水面に見える魚をタナへ入れないためにも、ときには、少し沖めに振り込んでみるのもひとつの作戦だ。

ウキの動きで言えば、なじんでからなかなかウキが上がってこないとか、フワフワしているだけとか、強いアタリが出ないというようなときは、「粒戦」を指でつまんで（20ccくらい）小分けしたエサに差し込んで打ってみる。魚がはしゃぐエサなので、ハリスは6cmと25cmをベースに微調整しよう。ウドンも大きめを使いたい。

くわせ1
特選わらび彩

6㎜径の場合標準の水の量でOKだ。5㎜径の細めで絞る場合は、水を約15cc少なめに作るとよい。

くわせ2
感嘆15cc＋水30cc

軽くする、コシを出すため、シェイクして練りこむ。練りこまず使う場合は、水を25ccにするといい。

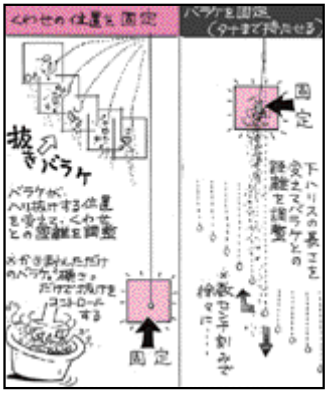
新製品
「粒戦」
その有効性&使いこなし

バラケ（麩とさなぎ粉の粒）からペレットの粒が降り注ぐことにより、へら鮒が撒き餌の感覚に錯覚する。そこで警戒心が解かれ、ウドンなど、固形物を安心して食べる。養殖べらが多ければ多いほど効果的。

釣り場では、バラケの基エサに加える作り方と、後から差し込むこともできる。また後差しにもそのまま加えるやり方と、水で浸しておいて加える方法とがある。

手直しでは、やわらかめで持たないバラケでないとアタらない場合に、それでは魚がウワズって食いアタリが出ない状態のときに、加えると特に効果的。

逆に、硬めで持たせた方がアタるときは、あえて入れなくても食いアタリは出るしカラツンも少ない。このようなときは、入れても少ない方がよい。



●付録
抜きバラケってなに？

短いハリスのまま大段差と同じ効果や、超お待ちの状態にする方法が“抜きバラケ”釣法だ。これは、段差を調節するように、バラケの抜く位置を調整して、アタリを出す釣り方。バラケを持たせた釣り方の場合、下ハリスの長さで、段差（バラケとくわせの距離）を調整したが、抜きバラケの場合、くわせエサの位置を一定にし、バラケがハリから抜ける位置を調整して、くわせエサとの距離を調整する逆発想。かき回しただけのバラケエサを硬さだけで抜ける位置を調整するのが、秘訣である。

●釣り方&エサ使いのコツ

抜けるのが早すぎると全くサワリが出ないので、そのときは、「セット専用バラケ」を200ccにしてみよう。また、たまにアタるがウワズった感じのときは、バラケた粒子がくわせエサのほうへ向かっていないとが考えられるので、「粒戦」100cc＋水100ccを10分放置しておいたものを50cc加え、バラケの粒子が確実にくわせエサに降ってくるようにする。

ハリス調整は、上ハリスは、5～9㎝くらいが基準である。下ハリスは、20㎝でスタートし、アタリは出るがサワリが大きいときは、3～5㎝短くしてみよう。また、アタリの出方が、サワリがなく唐突なときは、それで釣れれば良いが、カラツンになったらすぐに、3㎝ほど長くする。

ハリスを長くしても、バラケを変えても食いアタリが出ないときはウキが大きすぎるといえる。逆に、小さすぎるとバラケをいくら小さくしても、寄りすぎを感じるし、下ハリスが短いのに、ウキが踊ってしまうようなときも、小さすぎるといえるだろう。

抜きバラケのブレンドパターン
新B200cc＋セット専用バラケ100cc＋粒戦50cc＋水100cc

＋

＋

＋

浅ダナのセット釣りこんな時どぉする？

Q1 ウワズリがきつくなったときは？

A1

ウワズリ時には、ウキのサインとしてモコモコするような動きや、軽々しい変化が連続するようになる。そこへバラケ性の強いエサを打ち続ければ完全に上層に魚が上がり、強いイトズレでウキは踊るようになってしまう。

そんな状況になってからでは本当は手遅れだが、ここで「粒戦」を配合したエサを意識的にピンポイントで打ち込む。数発では訂正できないときもあるが、きっちりとなじみ幅を出すようにして、時にはウキが沈没しても良いのでとりあえず魚を下方に向かせることが回復の第一条件となる。

Q2 当たるのですがカラツンが消えません

A2

カラツンには様々な原因があり、①バラケエサの持ち過ぎ、②ハリスの長さ、③くわせエサのサイズ、④タックルセッティングなどが考えられる。

①は、エサの微調整は当然だが、ハリのサイズを小さくすることで、バラケエサが自然に切れて上エサに当たるカラツンは多少防ぐことができる。

②は、なじみ際に強いアタリが出て空振りが続くときには、上エサに対して反応していると見て良い。この場合には上ハリスの寸法を徐々につめていくと反応も弱くなり、時には３㎝位の短ハリスが正解になることもある。

③くわせエサは、「力玉」、「感嘆」、わらびウドン「彩」の順で重くなるため、魚の活性や寄り加減で使い分けるようになる。基本的には、活性が低くなればなるほど、エサを追わなくなり、ウキなども小さくして全体を軽くしていくことからも、軽いくわせエサを使うようになっていく。

④全体のセッティングとしては、水流対策と抵抗を極力少なくするためにもシンプルで繊細なものが適している。魚も学習能力があるため、より吸い込みやすいタックルで釣ることが特に厳寒期には必要になる。